
民主主義の王子様

和泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

民主主義の王子様

【Nコード】

N9024X

【作者名】

和泉

【あらすじ】

イギリス育ちの超御曹司の少年 美咲。

いくらでも使える大金、裕福な生活。

だが彼の心は乾いていた…

どういつもこいつも金目当てで 俺が御曹司だからって近づきやがって。

決めた。俺は日本に帰ったら親の言いなりで氷帝になんて入らない。

俺は身分を隠して素の俺のままを受け止めてくれる友達を作る！！

大金持ちの少年が四天宝寺で身分を隠して生活するドタバタストーリー……！

女の子のような容姿に触れてはいけません。

【作品の都合上、原作とのズレが生じる恐れがあります。】

第二章「立海戦編」スタートしました！

はじまり。

俺はイギリスに生まれてしばらく育った。

両親も申し分なく俺を育ててくれて何不自由なく育った。

それは凄く感謝してる。だけど俺の周りはいつも金目当て。身分目当て。財産目当て。

そんな生活はあまりにもバカバカしくてアホらしくて。

14歳になったら日本に帰る事になっててやっとその生活から逃れられると思った。たら今度は氷帝だかなんだかの金持ち学校にぶちこまれるらしい。

ふざけんな。いつになったら友達作れんだよ。

「本当に俺様の学校に来なくていいのか？アーン？」

「だから大丈夫だって言っただろ。俺はここに決めたんだって。」

栗色にふんわりとした髪。髪はやや長い。瞳は薄い青色。

携帯越しにやや切れている様子

白いワイシャツに自前の蝶ネクタイ。灰色チェックの短パン。白い靴下。黒の光る高価な靴がお坊ちゃん具合を漂わせているがこれでも安物に妥協した模様。

長いまつげは下を向き、学校の看板を読む

四天宝寺中学校

美咲はやや緊張した様子で学校に入っただった。

門をくぐると校長が出迎える。

今回の入学は半ば強引 わがまま入学だ。おぼっちゃまの一人暮らしという事もあり大金を支払い一軒家 メイドを揃え親は行けと言ったのだ。

そして学校には息子を頼むと人睨み 校長も身震いする。

いつもの美咲なら鞆を渡して ロッカーに置いておけ と言っただけが
今回は我慢。

重い革製の鞆を握り テニス部の場所を聞く。
門から歩いて4分。

男子テニス部につくと緊張より高揚が大きかった。

自分の事を知らない人達、その中で自分をどうやって受け入れてくれるんだろうと期待が膨らむ。
じわりと手のひらに汗が滲む。ドアノブに手をかけ 部室ドアを開けた。

「？」

部室には一人。金髪で髪質の固いやや長身の少年。

美咲を見たことのない奴 と言わんばかりに凝視する。

「・・・おいその金髪。ここ、テニス部だよな？入りたいんだけど。」

少し声が上ずる。

わずかに自分の心臓の音が聞こえた。初めての環境。

だが少年はとんでもない事を言った。

「あー…ここ男子テニス部だから。
女子テニはそっち。」

平然と右を指差す少年。

その瞬間ピキッと美咲の中で何かが切れた。

「・・・は？」

顔が引きつる。

「え？だって。お前女やろ？女が男子テニス部に入るなんてお笑いやんけ。」

「お・・・おま。俺が・・・男？」

わなわなと静かにつぶやく。

「え？」

美咲の空気にぎよっとする少年。

だが遅かった。美咲はくわっと少年を睨み

「俺は女じゃねーーーーーーーー！！！！！！！！」

叫んだ。

俺は女じゃねー！！！！

「ほんつとーにスマンかった。」

深々と頭を下げる少年。美咲は切れている。顔は真っ赤になり涙目で睨む。

「おいお前・・・俺が女に見えんのか？」

「うん。見える。」

「即答か！！！！」

思わず突っ込んでしまう。

「だってまつげ長いし目がぱっちりしとるし。声高いし。なんか・・・香水？ええ匂いするし。」

「んだお前。変態か？玉つぶしてやろうか？ああ？」

革靴で少年をぐりぐりと踏む。

「いでででで！！最後のはギャグや！ボケたんやって！ツッコみ返せアホ！」

「知らねーよ！大体お前テニス部の部員か？」

「ああ。せや。俺は忍足謙也。中学二年生や。」

謙也は張り切ってロッカーを指差す。確かにロッカーには『忍足

謙也』の名前が書いてある。

「ふーん・・・俺と同じ年か。俺は美咲。転校生だ。よろしくな。」
すると

「どうした謙也！なんか怒鳴り声が聞こえたんやけど！！

部室にカーネル・サンダースでも出たか？・・・ってんん？」

銀髪の柔らかい髪。繊細そうな美形の少年。の横には緑の髪に釣り目の少年。

ドアが乱暴に開く音に思わず振り向く美咲と緑髪が目が合った。

「ん？なんやコイツ。変なカッコしてんで。」

美咲の服装を指差す。四天宝寺は学ラン。たしかに美咲の恰好はおかしい。

「ああ。学ランだかなんだかつーのは俺に似合わなくて。」

「で、テニス部になんか用なん？」

銀髪は小さい子を見るような表情で美咲を見る。

「おう。テニス部に入部したい。」

「なんやお前女みたいな顔・・・もごっ！」

緑髪の少年の口もとを慌てて謙也が塞ぐ。

「なんかコイツ、顔が女みたいって言うのは禁句みたいや。

さっき俺言ったら大声出されたっちゅー話や。」

「なんやねんそのやり取り・・・」

ツッコむユウジに 黙れアホ と言。仕切り直しとばかりに謙也は銀髪を指差す。

「美咲。この銀髪は白石蔵ノ介。二年生で一番強い。見た目はイケメンだけど中身は残念やで、

んでこっちの緑髪は一氏ユウジ。中身はそっち系や。」

「は・・・！？そっち系って事はお前・・・」

瞬きする美咲。すると謙也の頭をわしずかみにするユウジ。

「あー。いらんこと言わなくてもええ。

俺は美咲みたいな顔は好きやない。好きなのは小春だけだから眼中にないわ。」

「小春・・・？ってなんだ？女か？」

「小春はこの部活の部員や。まあ…ちょーっとそっちもユウジみた

いな感じの奴なんやけど悪い奴やないから安心しーや。

あ。そうだ、謙也。先輩たちは修学旅行で居ないからしかたないけど二年は皆いるし美咲に紹介もかねて呼んできてくれへんか？」

「えええ？さつき家から学校まで走ってきたんやけどまた走るんかい」

「ぶつくさ言わんではよ行く！浪速のスピードスター！」

「そつ・・・その通り名言われたらそりゃ行くしかあらへんやろ。」

不満そうな顔をして校舎めがけて走る。

三人になった部室。白石は美咲をじっと見た。

「な・・・なんだよ。」

見つめられて良い気はしない。

「なあ、美咲。お前はどこの県から来たん？」

「県？」

「ほら、東京都とか神奈川県とか・・・」

「・・・ああ。俺は・・・イ」「あらなんや可愛え子ー！ー！ー！ー！」

言い切る瞬間に坊主頭に抱き着かれた。うぐっ！と鈍い声をだし床

に倒れる。

少し咳き込む美咲にお構いなしにすり寄る。

「ねえ蔵リン。この子が謙也の言ってた新入りの子？可愛いわー！
美少女やん！」

「だから俺は男だっつってんだろ！！！！
お前こそなんだよ。女みたいな口調しやがって！・・・うっ！」

突然 尻を撫でられそそと背筋が凍る。

「んゝ。アタシは金色小春。四天宝寺テニス部の部員。よ・ろ・し・
く」

「小春うううう！！！！何美咲みたいなちんくしゃな男相手にし
てんのやー！俺がおるやろ！」

半泣きで小春のそばに猛ダッシュ。小春は低い声で 黙れ一氏。

「一氏。お前がさっき言ってた小春ってのはコイツの事か・・・す
げえ趣味してんなお前。」

「そつや！可愛え顔してるやろ！お前の数百倍小春は可愛え顔や！」

「んゝ・・・ああ。」
少し疲れた顔で相手する。 コイツに何話しても無駄だな。と美咲
は悟った。

俺の紹介

「こぎゃん、むぞらしか子ばいね。」

「んああ？なんだコイツ？何語話してんだ？」

「・・・む。標準語とは関東地方からの転校者と見受ける。」

「うおっ！お前ら二人並ぶとデケえな！」

身長145cmの美咲から見るとあまりにもデカい。二人並ぶと巨大なビルのように。

動揺する美咲を目に白石はたはたと笑う。

「あー。美咲。コイツらはテニス部。」

左の黒髪モジャモジャは千歳千里。喋ってんのは熊本弁。

右の巨漢は石田銀。寡黙そうに見えるけど意外とノリはええで。」

大きすぎて少し恐怖感がある。

そんな事お構いなしにと千歳は美咲を持ち上げた。

「うわっ！！てめえ何すんだよ！離せ！」

「こうすると同じ目線ばい。」

美咲を軽々持ち上げ、そのまま上に持っていき肩車した。 下ろせと叫ぶが千歳は聞こえないフリ。

どこまでもマイペースな男にパニックになる。 はたから見るとその身長さは親子。 思わず皆笑ってしまった。

「おい！なんでお前ら笑ってんだよ！特に忍足！白石！」

「だって肩車して親子やん。」

そういわれて急に恥ずかしくなった。「おい千歳下ろせ。 今すぐ下ろしやがれ！」 真っ赤になって怒る。

その動揺ぶりが逆にウケを狙っているように思えて皆ますます笑う。

「美咲は軽いばい。」

「うつせ！ほっとけモジャ毛！！」

千歳の髪をわしずかみにする。

「なあなあ。 俺、美咲の自己紹介聞いてないんやけど。」

「おう。 そうか。 そういえばさっき白石にも聞かれたけど金色にタックルされて言えなかったしな。」

もぞもぞと千歳から自力で降りると皆の顔を見渡し言った。

「俺の名前は城ノ内 美咲。 お前らと同じ中学二年生。」

イギリスで生まれた。 髪や目の色は生まれつき。 クォーターなんだ。

家庭の事情で日本人祖父の方へ一年間位帰る事になって大阪に来た。だから日本の事は本でしか知らないから教えてくれると助かる。よろしくな。」

「へー・・・イギリス育ちつてのはまたゴツイな・・・」

「テニスはやってたん？」

「おう。・・・まーテニスはそこそこかじってた。」

「なんか釈然としない言い方やな・・・そんなんじゃ俺らの代優勝出来ないで？」

「何？そんなにここ強いのか？」

「知らんでここ来たんかい・・・阿呆か。」

苦笑いするユウジ。身を乗り出し謙也が勝ち誇ったように美咲に言う。

「美咲！俺らの部活は『勝ったモン勝ち！！』っちゅー話や！！！」

「勝った・・・モン勝ち？」

「せやで！勝ちたい気持ちと実力があればええんや。」

「じゃあ実力あったらすぐレギュラーになれんのか？」

純粹な問い。白石と謙也がお互い顔を見渡す。

「・・・え、まあ俺ら全員倒して先輩も倒したらなれるかもな。」

「けどそれは無理っちゅー話や。現実味ない。」

皆ドツと笑う。嫌味ではなくノリの笑い。きょとんとした美咲。

「そうか。わかった。試合しようぜ。」

「は？」

イギリスからの王子様

「対戦ってテニスか？」

「当たり前だよ。」

面白そうに笑う。ロッカーに立てかけてあるラケットを拾う。古く木製のラケット。ガットが少し切れている。

「そのラケット。もう捨てる予定なんやけど。」

「いや これでいい。使いりゃいいんだよ。で、誰とする？」

コンコンと床をラケットで叩く。リズム良く。

誰も名乗り出ない部員。彼らとしての心境はいきなりの転校生に試合をしたいと言われ戸惑っている様子。

「・・・ったく。じゃあいい。まず右端の忍足から順。

金色。石田。一氏。千歳。白石。の順でどうだ。」

「ええ？でも一人で全員は無理やっちゅー話「俺を待たせんじゃねーよ！ー！」」

舌打ちをし、ラケットで皆を指す。

あまりに横暴な態度に謙也は一氏に言う。

「・・・いくらイギリスでテニスかじってたからって俺ら相手にするのは無理やる。・・・やめさせようや。」

「いや、逆にとつと勝てばコイツも納得すんやろ。なんか情緒不安定なやつちな。この女顔。」

そういつて一氏は謙也のロッカーを開ける。ハンガーからユニフォームを取り、謙也に渡した。

「おい・・・美咲は制服なのにお前ユニフォームって・・・」

「試合するんや。ユニフォームやろ。」

「わかってんじゃねえか一氏」

謙也は自分のユニフォームを見つめる。少し考え 着替えた。

謙也が着替えると校庭に出る。今日は休日。グラウンドは誰も使っていない。

静かな校庭にテニス部二年生だけ。

「美咲。5点マッチで3ゲームや。」

「へいへい・・・わかったよ。先行は俺からでいいか？」

「ええで、早くしい。」

独特の構えでサーブを打つ。謙也のコートにボールが行った。

なかなかのスピード。だが

「ええな。けど十分打ち返せるで！」

謙也は余裕で追いつく。ガットでボールを当て 美咲のコートに入れた。

美咲は両手で持っていたラケットを片手に持ち替え 跳ねるボールを見る。

「え？」

一瞬だった。

「え？」と一言いう間に既に謙也のコートにボールが入っていた。

「は・・・速い。」

「今、美咲がラケット振った瞬間 見えた奴おる？」

ユウジが皆を見渡すが首を横にふる。

「いや、見えなかった。」

茫然を美咲を見る白石。

「今のなんや？どうなってるん？」

「あの子・・・ウチが見た所やとフォームは蔵リンに劣るけどすぐラリーに慣れてる感じ・・・
多分相当テニスしてんやろうな。」

「小春は美咲の振り見えてたんかい！」

「さすが小春やな・・・。絶頂や」

「おい、白石。小春は俺のやで。」

その頃コートにいる謙也は転がるボールを見つめていた。

「おいおい忍足。まさか俺が今打ったボールに手も足も出なかったとかねえーよな？」

「・・・あんなボール見えるわけ無いやろ？」

「はっ。せめて次は目で追うくらいはしてくれよな。」

不敵に笑い 続いて二球目 サーブを打ち込んだ。

実力

その後四天宝寺はなかなかの苦戦試合だった。

金色 0 - 3 美咲

石田 1 - 2 美咲

一氏 0 - 3 美咲

千歳 1 - 2 美咲

白石 2 - 1 美咲

1勝6敗 四天宝寺の惨敗

ただ、聖書 白石にはフォームやテクニクの差で敗退。

千歳との試合ではお互い僅差の試合だったが最後の最後で千歳の敗北。ほぼ引き分け状態だ。

「・・・暑っち。」

蝶ネクタイはポケットにしまい Yシャツを腰に巻き、白いTシャツに短パン。腕で汗を拭う。

ぼろぼろだったラケットはガットが破れていた。

「やー凄い凄い。一人で6人相手つてのは。さすがジュニア大会の準優勝経験者。」

パチパチと気だるい拍手をしながらこちらに向かってくる一人の教師。派手な帽子に生えかけのあごひげ。白衣。

「オサムちゃん！？試合見てたん？」

「ああ。職員室からバッチリ見てたで。なんや勝てたの白石だけだったんかいな。ま。千歳は惜しかったけど。」

「んなことより美咲がその…準優勝つてのはどういう事なん？」
その問いににんまりし、オサムは美咲の頭をわっしわっしと撫でながら話す。

「あー。なんかな。コイツ、世界ジュニア大会でシングルス成績二位。」

「はあああ！？」

大阪人の血が流れてか皆ここぞとばかりのオーバーリアクション。

「おい。頭撫でんなよ……。」

嫌がってオサムの手を退ける。

「みつ……美咲。何が『テニスはそこそやってた』やねん。かなりの経験者やないか！」

「……忍足。耳元で叫ぶな。口で自慢すんの嫌だったんだよ。」

「そんなくらいのレベルなら手塚や跡部にだって太刀打ち出来るんじゃない？」

おお そうや と希望が湧く。

「・・・跡部。」

「ああ、日本の強豪や。関東に居るんやけどな。去年はストレートで。けど美咲が入部してくれんなら面白い事になりそうや。」

「ふーん。跡部か・・・」

嫌な予感しかない美咲の気持ちを誰も知らず事を進めていく

「オサムちゃん。転校生って部活動出来るやろ？」

「当たり前や。千歳しとるやないか。」

「せやった！じゃあ先輩達が帰ってきたら美咲の入部許可しようで！」

「は？俺はすぐ入部とかできないのかよ。」

「一応な。先輩達は次の試合で引退やけどそういう時期に自分らの知らない所でいきなり入ってた奴おつたら何か嫌やろ？」

繊細な白石らしい言葉。汗を拭い なるほど と美咲はつぶやく。

「わかった。じゃあこれからよろしくな。」

わきあいあいとする四天宝寺。その様子をオサムが見つめる。

「（实力はあるとはいえさっきの口の悪さ・・・。二年生は同い年だから美咲を受け入れてくれたけど三年生はなー・・・）

「トラブルに発展しなきゃええんやけど・・・」

クラスと牛乳プリン

「えっ・・・と。これから一組で世話になる城ノ内美咲だ。
・・・よろしくな。」

緊張した様子でクラスにあいさつした。

美咲の容姿や変わった服装に驚く人が多く、一方で女子は嬉しそうに美咲を見ている。

「えー？男の子なのにちっさ！可愛えなあー！」

「はあ！？俺は男だ！かわいいとか言ってるじゃねーよ！」

「やーん。反論してるー。可愛えー！」

黄色い声援も美咲にとっては喧嘩を売ってると同様。

女子の一言に真っ赤になって反論する。しかしますます「かわいい」と言われてしまう。

「まあまあ美咲・・・とりあえず席つけっちゅー話や。」

「ああ・・・。まあ忍足と同じクラスになれたのは良かった。」

「二年生はほんと部員バラバラやもんない。せや、委員会も一緒に入ろうや。」

「おう。忍足は何委員なんだ？」

「俺は放送委員や。昼の放送担当やで。」

「ふーん・・・じゃあオサムに話して俺も忍足と同じ委員にするわ。」

「いや、クラスなんやからクラス担任に話せや！」
クラスということもあり少々抑えてツツコむ。

「でたツツコミ。なあ忍足。俺まだ校内とかよく分かってねーから後で案内してくれねーか？」

「え？ああ。せやね。昼の時に学食で飯食ったら探索でもしようか。」

「ああ、頼む。へへっ。」

期待に笑顔が出る。その表情をみた謙也は驚いた。昨日はこんな表情を見せなかったからだ。

こいつ 一旦テニスから外れると結構普通な奴なんだ ふいに思う。

「で、まずはここが学食やで。粉もの多し。けどカレーとかラーメンとか一般的に置いてるものも充実してるで。」

「へえー・・・」

学食は広がった。教室で使われている部屋の二個分くらいの広さ。それに白い長い机がいくつも置いてあり 椅子がある。学生たちは

食券を買ってカウンターに持っていき 食事をする。

謙也と美咲が学食に到着するときには二年生の部員メンバーが既にいた。

「おお、美咲。謙也。来たか。」

「おう。俺はお好み焼き食うんやけど美咲は……って何自動販売機に貼りついとる。」

「忍足！これ……この白いプディングなんだ？」

「それは牛乳プリンや。なんやイギリスじゃあ無いんかい。」

「初めてみる。うわ。すっげー何これ！」

目をキラキラさせ牛乳プリンを見つめる。ポケットから財布をだし小銭120円を取ると入れる。

すると一瞬でプリンが販売口から落ちてきた。自動販売機の横の袋にたくさん入っているスプーンを一本取った。

「よかったな。美咲。」

「ああ！」

先ほどより輝いている笑顔。童顔だからよけい無邪気に見える。小春はその笑顔をみて「あら可愛い」と一言。

「あの……美咲。俺、昨日居なかったから自己紹介しとくな。二年の小石川健二郎や。忘れんといてな。」

「うわ！牛乳プリン甘っ！うめー！」

「人の話聞けや！」

「ああ、悪い悪い。小石川。俺は美咲。よろしく。お前とも一戦してえな。何なら牛乳プリン食ったらするか？」

「え？」

「小石川。やめとき。美咲にボッコボコにされるで。」

半分本気、半分冗談でからかうユウジ。小石川はぎょっとした表情になる。

「えー 試合しようぜ小石川」とテニススイッチが入るが牛乳プリンの美味しさで浄化。

「先輩達明日沖縄から帰ってくるんやっけ？」

銀がふとしたタイミングで言った。

「せや。お土産なんやろうな。」

「俺的に紅イモタルトが嬉しいばい。前に桔平から貰ってうまかった。」

「わかるで！けど個人的にはちんすこうも捨てがたい所や。」

「おい。先輩ってのは何人いるんだ？」

「先輩は4人やで。」

「ふうーん。意外と少ないんだな。」

興味のなさそうな適当な返事。だが美咲の中には下剋上という言葉

しかなかった。

その雰囲気を感じた白石はやや苦笑い。

「美咲。相手は先輩なんやから明日はちゃんと挨拶するんやで？
無礼はダメやで？」

修学旅行からおかえりなさい

次の日

気温は23°。天気はやや小雨。

校庭はぬかるんでおりテニスコートも滑りやすくなっていた。

防水用のテニスシューズを履かないと危険。

なので本来は練習をやめたほうがよかったが、三年生が帰ってくるのでどうしても部活をしたかったのだ。

先輩達が修学旅行から帰ってくる。

二年生の雰囲気もどこかそわそわして落ち着かない様子。

準備体操をしてラリーをした。

そのとき

「おー！後輩達！！俺らがいない間元気にしてたか？」

髪は青色。ワックスで髪を固めていて小さい背をかさまししている。

制服をだらしなく着崩している。

「黒木先輩！！お久しぶりですわ！！」

美咲以外の二年生が黒木に駆け寄った。背が小さいため囲まれると見えなくなる。

黒木は「だから囲むなって言ってるやろ」と冗談めかして言ってみた。

「お前ら二年生にお土産買って来たんや。さてなんや思っ？」

「紅イモタルト!!」

「シークワサー!!」

「残念。正解はこのエロ本…」

黒木が鞆から取り出すしぐさをした瞬間後ろからきた少年に頭を叩かれた。

「痛いわ!!何すんじゃ前田!!」

黒木はオーバーに頭を抱える。

「お前。あない卑猥なもんを後輩に渡すなドアホ。」

あ、こっちがホントのお土産な。」

「おおきに!!」

そういつて紅イモタルトを手渡した。前田と呼ばれる少年は細身だが背がうんと高かった。黒木と並ぶとその差は一目瞭然。黒髪が真面目さを引き立たせている。

「おい。黒木も前田もは早いよ。置いていかないでっっていうたのー。」

「あつ！！桑野さん危ないっ！」

白石がまったをかけたがすでに遅し。

桑野は顔から転んだ。

「うわっ！鼻血出とりますやん！大丈夫ですか？」

「えへへっ。またコケてもうた。」

「ったく…ホラ。」

前田が手を差しのべる。起き上がると自分の服の裾を使い、鼻血を拭いた。

薄い桃色の髪がふわりと揺れる。美咲は思わず桑野を見つめた。すると目が合った。

「あれ？可愛い女の子さん。」

誰の彼女さんかな？

「はあっ！？」

「お嬢さんお名前は？」

小首を傾げて美咲を見る。

「城ノ内美咲だよ！！俺は男だ！！

二年生の転校生でテニス部部員になったんだよ！」

「あらあら、ごめんね。僕たちが修学旅行に行ってる間にそんなことになってたんだ。」

じゃー…みさみさってのはどうかな？」

「は！？なんだよそれ…！」

「あだ名だよ。俺ね。いろんな人にあだ名付けるの好きなの。

前田はまえくん。黒木はくろちゃん。

白石はしろちゃん。だから城ノ内はみさみさね。」

「誰がみさみさだ！！勝手に気持ち悪いあだ名で呼ぶんじゃねえ！」

「えへへ。ダメだよ。先輩の言うことは絶対なのだ。」

無邪気な笑顔で微笑む。

「・・・すまん美咲。桑野さん天然なんや。」

みかねた小石川が耳元で伝える。

やりづらい。と美咲は固く思った。

挑発（前書き）

第一章「転校編」も起承転結の「転」にさしかかって来ました。
二章の準備をもそもそしつつ、一章完成したいです^^

挑発

「お前か。四天宝寺に転校してきた二年生うちゅーのは。」

「ああ…そうだよ。」

前衛的な髪型。雰囲気が他の部員達と明らかに違う。なにかしでかしそんな雰囲気漂わせている。

「俺はこのテニス部の部長やってる原哲也。……ハラテツやで。よろしゅう。」

「おう…。俺は美咲だ。」

お前ら三年が修学旅行に行ってる間に俺が来たつつうわけだ。で、お前らは今やってる大会が最後だろ？」

「せやで。まあ次戦う立海に負けたらやけど。」

「立海って…」

なぜか美咲の表情がひきつる。続けて。

「まあいい。オーダーが決まってねーなら俺が試合に出たいんだが。」

「ばっ…！お前何ゅーとるねんて！」

小石川が慌てて美咲の口を押さえる。

その様子を見ても原は話を続けた。

「ほう…お前がか？」

「実力に関してでは実際に試合してくれねーとわかんねえと思うがな。」

お前ら三年と俺で今から勝負しようぜ。特にオーダー予定の奴と。勝ったやつが次の試合に出れる。」

「…そういう話やと白石も出るから美咲と闘わなあかんことになるで。」

「白石はいいんだよ。この前2年で試合したし。」

それを聞くと原は二年生を見た。

「お前達はコイツと試合してどうだったか？」

「強かったです。美咲は…転校初日で俺らと試合をして四勝一敗でしたわ。」

「一敗か…それが白石っちゅー事やな。」

「そうなります。」

それを聞くと三年生の目付きが真剣になった。

「…美咲。お前の实力を知りたい。
三年生と試合しようや。」

「おう。」

ニヤリと笑い蝶ネクタイを外す。

今回は自分のラケットを取り出した。

白がベースで黒いラインが入っている。

ラケットは大きく、美咲の身長と釣り合っていない。

「四人全員公式ルールでやってたら夜が過ぎて朝になってしまう。

どや、1ゲーム。どちらかが3ポイント取ったらにしようや。」

「ああ。いいぜ。

じゃあ最初に部長のお前来いよ。」

二人がコートへ向かう。

ピリピリとした緊張感が奔る。

そんな中きょんとした表情で桑野が忍足に話しかけた。

「ねえおっしー。みさみさってなんなの？」

「俺が聞きたいですわ……。アイツは……。見かけによらず攻撃的ですよ。」

「へー。あんなに可愛い男の子なの？」

「はい。だからもしかすると……。次のオーダーで何か変わるかもしれない。」

雨の中の絶望

「うつわあゝ・・・美咲の奴。ついにやってもた・・・」

黒木 0 - 3 美咲

前田 2 - 3 美咲

桑野 1 - 3 美咲

原 2 - 3 美咲

いよいよ本降りになってきた雨の中、誰もが絶句した。

転校して一週間。イギリスから来た一人の少年が。全国大会まで進めていった先輩達を完膚なきまでに叩きのめしたのだ。

誰もが言葉を失った。そして同時に美咲がとんでもない奴だと認識した。

雨水で糠っているコートから出る。美咲は三年生の中でも一番絶望している黒木を煽った。

「・・・はーん？お前ら先輩だのなんだの言ってた割には弱いじゃないかよ。」

これなら俺とほぼ引き分けだった千歳をオーダーに入れた方がいいんじゃないのか？

特に黒木。お前弱すぎんだよ。」

「うつさいわ・・・」

「大体、先輩だの後輩だの関係ねーじゃん。勝ったモン勝ち実力主義なんだろ？」

お前らお荷物だからとっとと引退しろよ。」

「うつさいって言ってるのわからんのかボケエ！」

甲高い声で怒鳴る。瞳孔が開いている。震えている唇。

そのまま美咲に掴みかかった。思い切り顔を近づけ睨みつける

「離せよ。」

美咲は至って冷静だった。その光景を見た周りの部員たちは思わず引きはがそうとする。

「み、美咲！ちょ・・・やめろって！！お前言い過ぎや！」

「うつせーよ白石。ホントの事言ってるだけだろ。」

それにお前もそう思ってるんだろ？ 実際こいつら弱いって。」

「そんな事思っていないしホンマ洒落にもならんことすんなって！」

「おいお前らやめろって。黒木も二年生の挑発に乗んなよ！」

「やかましいわ！ なあ、前田。俺らの事を弱いとかクズ扱いするのは許さんのや！」

「だからって・・・その腕離せって！ ケンカ沙汰は白石の言うとおり洒落にならんから！」

前田が二人をなだめようとするが一向に二人がおさまらず。

それもそのはず二人とも一旦スイッチが入ると止められない性格同士。止まるはずがない。

「いい加減に離せよ。服が伸びんだけど。」

「離さへん。」

「離せって言ってるんだろ！！」

両手で前田を押した。怒りが増大していたので勢いよく。

一瞬よろけて後ろ足を出した。本来ならそれで立て直せるのだが今

日は雨が降っていた。

雨水で塗れた地面は黒木の靴底を滑らせた。
変な体制で尻もちをつきそうになり思わず右手を地面につけた。

グキッ！

「…………ツ。」
固い。骨にひびの入る音。
手に 力が入らない。

まずい。と黒木は感じた。

「おいっ…………！黒木大丈夫か！？」

「……………」

「おい！立てるか？」
前田が黒木に駆け寄る。脂汗が出て表情がこわばっていく光景を見てマズイと悟った。
部員達も駆け寄り、桑野は保健教師を呼びに走っていく。原も才サ

ムを呼びに職員室へ行った。

残された二年生と前田。

その時美咲は何も考えられなかった。

「美咲！何ぼさつとしてんねん！」

「・・・俺。」

俺。このままだとどうなんだ？

両手に押した感覚がまだ残っていた。

放心状態の美咲を気に留める余裕はなく、しばらくすると保健教師が来た。

救急箱から包帯だのガーゼだのを出し、まず黒木の右手を触る。

「・・・痛って。」

「多分・・・捻挫ね。手首がここまでしか動かない・・・。」

変な体制で手に負担をかけたんでしょう。」

部員達皆絶句した。

捻挫。

オーダー予定の選手の捻挫。そして来週の立海戦。

四天宝寺に絶望が立ち込めた。

「……コイツ来週テニスの試合あるんやけど。」

「そんなの無理に決まってるじゃないの！

黒木君。今から先生の車で病院に行こう。修学旅行の荷物は学校に置いていいから。」

そういわれるとゆっくり頷いて校庭から出ようとした。

すると美咲が後ろで

「……俺は悪くねーからな。」

一瞬で空気がまた悪くなった

凍りつく空気の中黒木が振り返る。

「お前が……悪いに決まってるやろ。」

「うるせえよ……。大体お前が掴みかからなきゃ良かったんだよ・

・」

「いい加減にしろや!!!」

オサムが一喝した。普段の雰囲気とは違い真剣な表情。

「なんだよ……」

「やっぱりお前はトラブルメーカーになると思ってたわ・・・」

ため息交じりに言う。

オサムの後に原が言葉を続けた。

「お前、面白くないねん。」

「は？」

心底意味の分からない様子で美咲は聞き返す。

「態度デカいしひつかきまわすし言葉づかい悪いし。おまけに愛想悪いし。」

そんでもってテニス強いとかアホか・・・
いいか。そういうやつはいくら実力がアホほどあっても必ずチームに支障をきたす。

そういう人間ははっきり言って迷惑や。」

「迷惑・・・！？」

「そや。お前みたいな奴ははっきり言つと邪魔や。」

その言葉にカチンと来た。

お坊ちゃまという身分で小さいころから何でも良しとされ育ってきた人間。

初めて自分を否定されショックだった。

それが怒りに変わっていく。

「うるっせえんだよ！俺が迷惑だ！？平民のくせにふざけてんじゃねーよ！！」

そんなに俺の事嫌いか？むかつくか？」

「美咲落ち着けて！なあ！」

白石や謙也がなだめようともしゃきよりも頭に血が上り聞く耳を持たない。

「そんなに俺が嫌だったらなあ・・・！
こんな部活辞めてやるよ！！！！」

そういつて鞆を持ち 校門へ走り去った。

凡人でいるってなんて難しいんだろう（前書き）

いよいよ次話で第一章最終話となります。

このまま美咲はテニス部を辞めてしまうのか？大詰めです。

凡人でいるってなんて難しいんだろう

「くそっ！なんなんだよ！あいつら！」

美咲は一人自分の部屋にこもっていた。

大きなシャンデリアが煌々と輝く。それが目障りで大きなベッドに突っ伏した。

中途半端に穿いているスリッパも邪魔で脱ぐ。

不快感に目を閉じた。その瞼に今日の光景が浮かぶ。

自分は確かに実力はある。強い。だからきつとみんな自分を認めてくれる。受け入れてくれる。

そう思っていた、なのになんでこうなった？

友達ってどうやったら出来んだよ……

「お坊ちゃま。お電話が入っています。」

遠慮がちに美咲の部屋をノックし 入る老執事。

「……誰だ？」

「跡部様からでございます。」

「おう。俺様だ。調子はどうだ。」

「どーもこーもねーよ。なんで電話かけてくんだよ。」

怪訝な顔つきで話す。

「いや、特に用事はないがお前の事だから学校の連中と喧嘩でもしてそうかなと思ってな。」

「!! なんて・・・わかんた？」

「俺様と何年幼馴染やってたんだ。やっぱり当たったか。」

「・・・むこうが悪いんだよ。俺は・・・悪くない。」

「まあとにかく訳を話せ。聞いてやる。」

一瞬迷ったが素直に打ち明けた。四天宝寺テニス部に顔を出したこと。自己紹介をしたこと。

テニスの試合をしたこと。そして喧嘩をしたこと。

「状況は把握した。一言いう。美咲。お前何か勘違いしてないか？」

「勘違い？」

「今まで多少。我が強くてもお前がお坊ちゃんだから周りが許してくれたけど今回はお前の意思で親元離れて関西に行ったんだぜ？」

だれも理解者いない状況でお前が我貫いてもシラケるだけに決まってるんだろ。」

その言葉にまた熱くなる。受話器越しで大声を出した。

「じゃあどうすりゃいいんだよ!!」

「簡単じゃねーの。そんなくらい考えろよ。」

「簡単・・・?」

「俺様だって氷帝束ねるのは簡単じゃなかったんだ。」

お前もいずれそうなりたいなら考えろ、いつまでも子供のままでいいんな。じゃあな。」

電話が切れる。大きな室内に沈黙が戻った。

「黒ちゃんが捻挫したら試合出れないよあ。オーダーどうしよう・・・」

「不戦勝なんて出来へんし、白石の他に二年生出すしかあらへんやろ。」

「なあ先輩ら。やっぱり・・・美咲が試合に出るっちゅーのはいいんですか？」

謙也が遠慮がちに言う。すると前田が凄い剣幕で怒鳴った。

「何言つとんねん！アイツがもとで黒木がケガしたんやで？」

それにあんな性格の奴・・・」

「けど・・・。」

どもってしまふ。今どんなにいい事と言っても先ほど起こった状況がある。意味がない。

「…たぶん今の状況だと千歳が出ることになる。アイツなら立海の奴らと張り合えると思う。」

今回はあつちも二年生出す話やし、噂だとなんだか一年生も一人出るらしい。」

「一年生？」

「ああ。噂やけどな。入学して間もないけどテニス経験あつてゴツッ強い奴が一人おるらしい。」

「へー・・・。世の中そんなやつもおるんですか。」

「せや。とにかくオーダーの変更をオサムちゃんに言って変えてもらおうや。時間がない。」

「でもね前田ちゃん。今日はこんな雨ザーザーだしさっきみたいな

ことにならないようにもう帰ろうよお。

僕たち修学旅行から帰ってきたばかりだしね？」

えへへと無邪気に笑う。こんな状況でも周りを和ませるのが桑野のいいところ。「せやね。」と前田は言い今日は解散となった。

三年生は大きい荷物を抱えて自宅に帰る。

二年生はまだ帰るには時間があつたのでコンビニによる事にした。

学校から徒歩5分。少ないおこずかいで皆好きなものを買ひ、駐車場にたむろする。
肉まんを頬張る謙也。

「なあ・・・美咲の事ホント何とかならへんかなあ。黒木さんの事捻挫させたけどやっぱりテニスは強いし。

あのままテニス部辞めるなんてもったいなさすぎると思うんねんど・・・。」

「ん。それは俺も思う。千歳は今ここに居ないから次の試合出るとか出ないとかわからんけど俺的には次の穴埋めは美咲しかいないと思うんねん。

アイツいないと三強にまず太刀打ちすら出来へん。」

「小石川がそういうなんて思ってもなかったわ。お前は気苦労タイプから美咲の好きやないと思ってたんやけど。」

「そりゃ・・・俺だって美咲の言葉や行動にビビったけど実際学食

の時とか校内見学の時とか結構普通な奴だと思った。

俺らがうまくサポートすれば結構良いように事が回ると思っんやけどな・・・」

「結構美咲って俺らにとって必要な存在なのかもしれへんな。」

「先輩には嫌われとるけどなあ。」

「せやそれや。そこが問題なんねん。俺らがいくらアイツはええ奴なんやって言っても聞かないっちゅー話やし。」

うーんと唸る。

「そこはやっぱ美咲が変わらんことにはしょうがないやろ。」

あれから2日。美咲は学校にも来ずもちろん部活にも顔を出さなかった。

黒木の捻挫は全治三週間。

試合には出れないものの部活に顔をだし皆のテニスを見学していた。

桑野は美咲を気にしていたが三年生は基本的に美咲を嫌っている。

重い空気が流れる。もう誰もが美咲は部活に来ないものだと思っていた。

「まったく跡部のヤロー簡単とか言いやがって全然わかんねーよ。」

朝から栄養バランスのとれた高級な食事と食後に牛乳プリン。

昼はフレンチをとり昼下がりには読書をして過ごしていた。

日を増すことにイライラが募る。

とにかく学校に行くしかない。

これだけ悩んでも分からないなら直接悩みの種にぶつかって行かないと解決しないだろう。

美咲は着替え、鞆を持ち玄関を出た。

夜明け

放課後。練習時間も終わり、空はオレンジから深い紺に変わり星がチラついていた。

ネットを片付け ボールを回収する。

もくもくと片付け作業をし、ミーティングをした。今日の報告。その他。

「じゃあ次のオーダーは時間もあるしもう少ししてから決めていきたいと思う。」

今回の四天王寺はシングルのメインや。S1、S2、S3は慎重に決めていく。というわけで。解散。」

「ちょっと待ってください。」

白石が校庭を見つめ、右を指差す、一斉に右を向くと美咲が息を切らしながら走ってきた。

全力疾走して息切れの様子。試合の時よりも疲れていた。

「み・・・美咲？」

「城ノ内。お前はテニス部を辞めたんじゃないかったか？」

そんなお前がなんでここに来とんねん。」

原が冷たく言葉をぶつけた。黙り込んでしまう。たしかに自分はあ

の時テニス部を辞めると言った。

何故自分は学校へと向かおうとしたのか。

「俺自身も分かんねえよ。けど・・・」

美咲は黒木の前に行く。

「なんや。俺に用か？」

「・・・黒木。」

いや、黒木さん。」

けどな、一つわかる。

きつと自分の中でこんがらがってる感情は「プライド」で

今まで自分が貫き通して来たことは「間違ってる」って事も

美咲は黒木に深々頭を下げた。

「俺のせいでケガをさせてしまつて・・・。それで四天王寺に迷惑を掛けて・・・ごめんなさい。」

意地張ったせいで空気悪くさせちまつて。

だがな。これだけは一つ。意地とかプライドとか関係なく言える。

俺はこの学校でテニスをしたい。この学校が好きなんだ。

テニス部に戻りたいです。」

そうなんだ。俺は四天王寺が好きなんだ。初めて俺に怒ってくれた。お坊ちゃまとしてではなく「城ノ内美咲」として見てくれた。

初めて俺自身を認めてくれた。だから俺はこの学校でテニスをしたいんだ。

「…………頭を上げろや。」

そついわれ頭を上げる。黒木は複雑な表情だった。瞳をきゅっと閉じ「あゝゝ」と悶えた後言った。

「そんな面と向かって謝られたら許すしかないやろ！ああもう畜生！

俺も悪かった！あの時……言い方が悪かったし掴みかかって申し訳なかった。すまん！」

黒木も頭を下げる。お互い和解。部員達の空気が和やかになった。

二人の様子を見て原が微笑む。

「なんや美咲、ちゃんと謝れるやんけ。」

「・・・ああ。」

「そういう素直な気持ちがあるんならお前はきっと伸びる。これからの四天宝寺を担う一員としてやれる。」

部長の俺としても二年生に後を任せられるわ。」

「原部長！つて事は美咲は・・・。」

「ああ。テニス部に戻ってこい。そして次の立海戦で四天宝寺に貢献してくれ。」

それを聞いた二年生が歓喜した。

「よかったな美咲～～！」

「サンキユ。それに今回の事がお前らがいたから俺もこうやって戻ることができた。」

ありがとな。」

「何か照れくさいわあー。」

皆 照れ笑いになる。その光景を見守るオサム。

「美咲。お前は立海戦のトップバッターに当てる。勝ったモン勝ち。先勝してこい。」

「おう！」

その頃立海大付属中学校

「ねえねえ翔。次の四天宝寺戦緊張してる？」

「ええ、まあ。はい……。幸村さん達の足手まといにならないか心配で……。」

固い髪質。真つ黒い髪。重たい一重。決して容姿が良いとは言えない少年。

拳動不審な表情で部長と話している。

「あつはは。翔はいつも心配性だなー。」

大丈夫。同い年の赤也倒せた君ならきつと四天宝寺中学も倒せる。期待しているよ。」

「えっ……。！？ええええ。」

「それに……。美咲って言っただっけ？」

君の言ってた四天宝寺に居る兄貴の実力も気になる所だしね。

何ならオーダーに君たち兄弟をぶつきたいよ。」

「ちよっ、勘弁してくださいよ……。兄ちゃんと戦うなんて恐ろしい……。」

ものすごい勢いで首を横に振る少年。
部長が手に持っているオーダー表には『城ノ内翔』を書かされていた。

夜明け（後書き）

というわけで第一章「転校編」完結です。

ここまで読んでくださった読者様。本当にありがとうございます。
第二章は「立海編」となります。

事件も無事解決した四天宝寺と王者立海。お楽しみに！^^

関東地方へようこそ（前書き）

第二章の幕開けです。

今回は他の学校達と出会ったり、はめられて誰かがデートしたりします。

是非お楽しみください。

関東地方へようこそ

「おおゝ・・・標準語が多いってのが新鮮だな。」

ここは新宿駅。大阪から東京まで新幹線で来た。

新幹線を一度も乗ったことのない美咲はとても新鮮だったのだが、それ以上に駅に溢れかえる大勢の人波が不思議でたまらなかった。

「コラ城ノ内。ぼさつとしてへんで行くで。」

「おう。わかった。・・・ん？」

大勢の人混みの中 見覚えのあるユニフォーム。白と水色。そして見覚えのある顔・・・

「美咲！久々だな！」

「げっ！跡部！・・・に樺地！」

跡部率いる氷帝メンバーが集結していた。

美咲はあからさまに嫌な顔をして知らないフリをしようとしたが四天宝寺のメンバーも跡部をガン見。謙也は人一倍驚いていた。

「えっ・・・？跡部に侑士・・・それに氷帝メンバー？なんでここにお前がおんねん！」

「跡部からの命令や。なんだか今日の四天王寺戦を観戦したいって言うててな」

青髪にもったりとした髪質。丸メガネ。そして関西弁。

謙也はその少年のそばに駆け寄ると仲良さそうに話していた。

「忍足・・・その青髪と知り合いなのか？」

「知り合いっちゅーか・・・いとこ同士なんや。コイツの名前は忍足侑士。」

「いとこ？」

しかし容姿がほとんど似ていない。

侑士は美咲を見るな否やにこりと笑う。

「小さい身長に栗色の髪。薄い青色の目。それに蝶ネクタイ・・・

君が跡部の幼馴染の城ノ内美咲くんかいな？」

「ああ・・・」

不満げに美咲は跡部をにらむ。「お前、俺の事氷帝の奴に教えやがったな」と。

一方四天王寺メンバーは美咲と跡部が幼馴染という事実には驚いていた。

「ええっ！？跡部と美咲は幼馴染だったんかいな。」

「なんだ。美咲は四天宝寺の奴らに言っただけだったのか。」

「あたりめーだろ。」

小さくため息をついても言い逃れができないことに気付くと四天宝寺メンバーを見て紹介をした。

「・・・跡部とはイギリスに居た時に同じ日本人で同い年同士仲良くしてたんだよ。」

「たく跡部の奴、俺が日本に帰ってくるとわかったら『俺様の居る氷帝に來い』だのなんだの言いやがって・・・」

「へえ・・・イギリスに居た時から・・・それにしても・・・」

「なんだ？」

それにしても美咲と跡部。二人が並ぶと絵になる。

中学生とは思えない色気がある跡部と女と皆違えるほどの美少年の美咲。

この二人と一緒に生活をしていたイギリス時代、どれほど女子が騒いだのだろう。と思う。

現に今この新宿駅ではちょっとした人だかりがきている。

「・・・まったく最悪だぜ。大体なんでお前ら氷帝がこんなところに

いんだよ。」

「そう睨むなっつて。四天宝寺が立海と戦った。見学ってことで俺様達が来たんだよ。」

「いちいちめんどくさい事してんじゃねーよ・・・」

舌打ちをする。美咲自身 自分が御曹司という事を隠しておきたいのに跡部と幼馴染という事を四天宝寺に知られて内心びくびくしている。

「お前俺よりちっちゃいな！」

「は？」

氷帝のユニフォームを着た赤髪の少年。おかっぱで目が大きい。彼も身長が小さいが黒木と同じくらい。

美咲の方が小さかった。

「それに女顔だしな。俺より背の小さい奴珍しい・・・」

「てめええええ！ケンカ売ってんのか？お前だつて相当小さいんだよ！このおかっぱちび！」

「ちよっ・・・美咲。止めてっ！」

白石が慌てて美咲にストップをかける。

「岳人も止め。すまんなあ、お嬢ちゃん。コイツは悪気無いねん。」

「お前が今言った『お嬢ちゃん』はあからさまに悪気あんだろ！」

そうツッコむと四天宝寺側が爆笑した。「美咲 お前ツッコミ上手くなったな」と。

「おいそういう問題じゃねーだろ！」とさらにツッコむ。

「跡部さんと幼馴染なんですって？下剋上だ・・・」

和やかな空気を裂くようにきのこ頭の少年が呟いた。

「お前は何だよ！いきなり怖ええよ！」

「俺は日吉若と言います。」

「おい美咲。若は強いぜ。期待の一年生って所だ。俺様の座を狙ってる頼もしい奴だ。」

好きな言葉は下剋上。お前も気をつけろよ。」

「おう・・・」

「あつ、そろそろ電車に乗らな遅刻するで！」

前田が腕時計を見つめ 言った。

「そうか。じゃあ行こうぜ。じゃあな氷帝。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんだよ?」

「いや、俺らもその電車乗るんだが。」

「なんだよ!なんでこんな派手なユニフォーム同士が同じ電車に乗んだよ!恥ずかしい!だろ!」

「仕方ねーだろ。同じ目的地なんだから。」

「仕方なくねーよ!お前ら氷帝は車かへりで行けよ!」

「おい樺地」

「・・・・ウス。」

跡部が指をパチンと鳴らすと樺地は美咲を荷物ごと抱える。

「ちよっ・・・・樺地!おーろーせー!小さいころのトラウマがよみがえるから下ろせって!!」

「よし行くぜ平民ども!俺様についてこい!」

「てめーが仕切ってんじゃねーよ跡部！」

翔とオーダー

中学生男子テニス大会

そう書かれた看板を見た。 四天宝寺中学対立海大付属中学。

「うつわ・・・ここが日本のテニスコートか。 イギリスと変わんねーな。」

「当たり前や。 違ってたらえらい事になるで。」

黒木がツツコミを入れる。 美咲は黒木の右腕を見た。 ぐるぐると巻かれた包帯。

「黒木・・・さん。 俺アンタの分まで頑張るよ。 ケガさせちまったし・・・」

「ん・・・じゃあ期待してるで。」

すると

「さて、翔の兄ちゃんはどうだー？」

「ちよっ・・・！丸井先輩！そんな・・・！」

赤髪で中性的な顔立ちの少年にからかわれながら相手チームのベンチに移動した翔。

お互いの学校の関係で入学式家を出る日にちが違っていたからイギ

リス以来の再開。
美咲は思わず相手側のベンチに行っていた。

「・・・翔。」

「兄ちゃん。」

「『兄ちゃん』!？」

四天宝寺メンバーがリアクションする。

明らかに容姿が違う二人。美咲はややハーフかかっている顔だが翔は日本人顔。

「立海はどうだ? 楽しいか？」

「うん。ってか俺より兄ちゃんの方が心配なんだけど・・・

てつきり四天宝寺の部員さん達と喧嘩して部活辞めたりとかしてないかと思っただけ・・・。」

「そっ・・・そんな事ねーよ!

翔こそ一年生なのにいつちよまえにレギュラージャージかよ! それにお前テニス部には入らないって言ってなかったか？」

「あー・・・うん。けどね・・・」

びくびくしながら翔は幸村を見た。

「俺が誘ったんだよ。翔は一年生だけど実力があるし経験あるのにもったいないと思って誘っちゃった。」

正確には「強制的」だろ　と立海部員は思ったが何も言わなかった。

「四天宝寺中学校二年生　城ノ内美咲か・・・たしかに翔が言った通り性格も見かけも正反对だ。面白い。」

「あ？なんだお前は。」

「ちょ・・・兄ちゃんはすぐそうやってケンカ腰になって・・・この人は二年生の柳先輩。」

立海の三強の一人で参謀と言われるデータマンなんだぜ。」

「三強・・・？」

聞き返す美咲に幸村はにつこりほほ笑んだ。真っ黒な微笑みで。

「そ。俺ら立海大付属中学校には三強って呼ばれる人がいるんだ。」

一人目は柳連二。二人目は真田弦一郎・・・」

「三人目は誰なんだよ。」

「ん？俺。」

「！！・・・はっ。女みたいな顔してるお前が立海大のエースって所か？」

「エースは翔と赤也だね。けど、俺らは立海大の三本柱。絶対に倒れない最強の柱。」

「こつちだつて四天宝寺なめんなよ。勝ったモン勝ちテニスだぜ。」

背が違いすぎるので上目使いのような形で睨む。小さいながら良い目をしていた。

そう感じると幸村は面白そうにベンチに座る。

「こらあ！立海大生徒ではない者がこちらのベンチに入るとはたるんどる！」

雷神のような怒鳴り声。思わず身をすくめてしまった。

「うわっ！真田先輩すみません！俺の兄ちゃんであの・・・ちよつと久々に再開してテンションあがつて・・・何かすみません！」

美咲の分まで頭を下げる。

「何？翔の兄だと？コイツがか？ずいぶん似てないな・・・」

「あはは・・・よくそうやって言われます。」

苦笑い。兄弟の容姿が違うという事はあまり触れてほしくないのだが。

「とにかく翔の兄。お前は四天宝寺中学校のジャージを着ているな

「らそつちのベンチに戻れ。」

「へーい……」

めんどくさそうに四天宝寺のベンチに戻った。が、戻ったそばから質問責め。

「美咲イイ！なんで立海レギュラーに弟がいるって事俺らに教えなかったんや！」

「は？」

「そつやで！しかも全然顔似てへんし！」

「ああ……悪かったって伝えなくて。」

「なんで翔くんは立海に行ったん？両親どうしてるん？」

「わーかった分かったから落ち着け。」

翔と俺はれっきとした兄弟だ。この前クォーターって言っただろ？翔の方は日本人の血が濃く遺伝されたんだよ。

で、俺の両親は祖父の居る神奈川県に居る。翔も両親と一緒に暮らしてて俺は一人暮らし！」

「一人暮らし！？聞いてないで？」

「たりめーだろ。教えてねーもん。」

がくつと肩を皆落とした。「言えや」と。

「おーいお前ら整列ー！試合始まるから並べや。」

オサムは今日オーダーに出る部員を引っ張る。

今日のオーダーに出るメンバーは美咲、白石、原、前田&桑野、一氏&小春だ。

並ぶ途中、小春や一氏に「一人暮らしなら今度遊び行かせてや」と言われたがめんどくさいので聞いていないフリ。

オーダー順に皆並ぶ。立海もそう。翔は立海で一人だけそわそわしている。

「只今より立海大付属中学校と大阪四天王寺中学校の試合を始める！」

「S1は城ノ内美咲VS真田弦一郎」

（げっ・・・さっきのアイツか・・・）

（翔の兄か・・・面白い。）

「D1はジャッカル&丸井ペアVS金色&一氏ペア」

（うわっ・・・何かアイツら変な雰囲気漂ってるが大丈夫なのか・・・？）

（あらー・・・笑かしてやるわ）

小春はウィンクする。すると小声で「浮気か。死なすど」とツッコ

///

「S2は城ノ内翔VS原哲也」

（ひいひい・・・よりによって四天宝寺の部長さんと戦うなんて・・・）

（美咲の弟で唯一の一年生・・・お手並み拝見やな）

「D2は柳生&仁王ペアVS前田&桑野ペア。」

（黒木がオーダーから外れて今まで桑野と組んだ事が少ないけどここはそうも言ってられへん・・・）

（三年生とですか・・・）

「びよ」とつぶやく仁王

「S3は幸村精一VS白石蔵ノ介」

（でた。イッブス幸村クン。俺がどこまで通用するか・・・）

（ふふつ。時期部長候補同士やるとは・・・）

皇帝VS美咲（前書き）

こんにちは和泉です。

ついに試合編になりました。その前に皆様にお話ししておきます。

私はテニスの知識が曖昧でこれから先の試合編ではテニスのルールに詳しい方を見ると疑問に思うところがあるかもしれません。すみません……。

テニスの王子様という漫画についても知識が不足している所があり、矛盾を引き起こしてしまうかもしれません。ご了承ください。

皇帝VS美咲

「四天宝寺サービスプレイ!!」

美咲はボールを何度か弾ませる。

「っしかし俺より体格ふたまわりくらいデカインじゃねーのか…」

高くあげたボール。ラケットを上げサーブをおとした。

「!!!」

光速の文字が似合うスピード。

真田は瞬時に反応しようとした。が、ラケットにかすっただけでボールはライン越しに曲がっていった。

緊迫した空気なか次のサーブを打つ。

「速いな・・・。」

「ポケットとしてねーで次いくぜ。」

続いてボールを高く上げ、二球目を打った。

「其の徐かなること林の如し」

「!」

猛スピードで打ったボールは止まった。
ゆっくりと宙を舞う。

「侵し掠めること火の如く」

宙をまうボールは一瞬にして業火のような勢い。

美咲のコートに業火が来た。

ラケットをもち、左足を後ろに引く。

少し集中し、目を瞑った。

「おいおい美咲の奴目瞑ったぜ…？　どういう事だよ。」

観客席にいる向日が不思議そうに指を指す。

「あれは…」

目を開けた美咲は左手に力をいれ四天宝寺戦以上の速度でラケットを降った。

「電光石火！」

ボールは影分身のように裂け真田のコートに入る。

地面はまるで雷を受けたように焦げていた。

『0 - 15！』

「うわっ。　なあ跡部！！美咲のあの技なんなんだ？」

「電光石火。　小柄な美咲だから出来る技。

イギリス時代の時俺様もこの技には苦労したぜ…

さて、真田はどうするか。」

「おい真田。ラケットはボール当てるために作られたんだぜ？
次は当てろよな。」

さきほどラインギリギリに入ったボールの焦げを見る。あんな技見たことがない。

サーブをする。なんなく入り数回ラリーが続く。

「静かなる事林の如し……」

またボールを止めようとするがかする。

高い距離にボールが浮いた。

チャンスボール!!

ネット越しギリギリに美咲は走っていき力一杯スマッシュした。

が

「徐かなる事林の如く……」

先ほどのように威力を止められてしまいスピード0の止まったボールが宙を浮く。

「……」

ふわりと自分のコートにやってきたボールを真田と逆方向の場所へ打つ。

真田は追いつき、美咲のコートへと返す。

ラリーが延々と続く。

「美咲の電光石火……真田と相性悪いんじゃないか？」

「せやな……。真田クンの技で無効化されてまう。」

ボールがラインぎりぎりの所へと行く。美咲は手のスナップを利かせ、コートへ入れる。

来たボールを待っていたかのように真田はラケットを握る力を強めた。

「侵し掠めること火の如く」

「うわっ！」

『15 - 15!』

小さい身体で尻もちをついた。
さっきの衝撃で膝小僧こケガしている。

「兄ちゃんは真田先輩に完璧に押されてる……。」

「そうだな。これからの試合 確実に点差が伸びるだろう」

『15 - 30!』

『15 - 45!』

そして。

「うっわ……。1ゲーム取られてしもうた。」

「全然太刀打ちできない……。」

「転校時に俺らをことごとく倒して行った美咲が立海にまるで齒が立たないなんて……。」

小春は試合の様子をジッと見た。

ラリーを何度か続けている。しかし真田の技にまた点を取られてしまった。

「あの子……膝かばってない？」

「は？」

それを聞いて美咲を凝視する。必至にボールを追う姿。確かに先ほどよりぎこちなく 足をかばってる。

「ほんとや……。あれじゃあ勝ち目が……。」

その後、真田の風林火山に太刀打ちも出来ず。

『ウオンバイ 真田弦一郎 7 - 3!!』

「くそっ！」

大量にかいた汗をぬぐう。思わず拳でベンチを叩いた。

「まーまー。あの三強によく戦えたと思うで？」

「そうやで。お疲れ様。」

小春が笑顔でタオルを手渡す。美咲は少しムスツとしたが素直にタオルを取った。

「真田。お疲れ〜。」

「ああ。ありがとう。」

幸村にスポーツドリンクを手渡される。

ノートに何か書き終わると柳は真田の前に行った。

「弦一郎。城ノ内美咲と試合してみてもうだったか？」

「・・・。電光石火か。イギリスから厄介な技を持ってきたと思う。

今回の試合は俺が勝ったが次はどうなるかわからない。また試合してみたいものだ。」

「へエ。真田がそういうなんて面白い。俺の勘が当たってたのかな？」

「勘？」

「ふふつ。で、次の試合は誰かなー？」

「多分丸井先輩とジャッカル先輩のダブルスかと・・・。」

二人は既に準備をすませ。ラケットを持ってコートに行こうとして

いる。

「あの……。ジャッカル先輩頑張ってください!」

「ありがとうな翔。」

「二人はホント仲良いね。同じ空気が漂ってるし。」

「なんだよ俺には応援ないのか?」

頭をぐりぐりする。弟をからかう兄のようだ。

「いただただ!丸井先輩も頑張ってください。」

「当たり前だろイ。」

一方四天宝寺。立海ダブルスと比べ 様子がおかしい。

「なあブン太。俺四天宝寺と会場で会ったときから疑問に思ってたんだけどさ。」

「なんだ?」

「あの金色と一氏っていう奴ら……。何かおかしくね?」

「さあて!俺らの番やでー!」

「笑かしてやるわー!皆、みててな。」

ユウジのバンダナにはクジャクの羽が一本。赤いゴーグルをしている。

明らかにおかしい。立海のジャッカルもそりや疑問に思う。というより疑問に思わざる負えない。

さらにおかしいのは小春の恰好。

七色に染められラメが入っているキラキラのアフロ。メガネは駄菓子屋に売ってそうな鼻眼鏡。

「ちょっと待てお前ら！明らかにテニスをしに行く恰好じゃあねえだろ！コントか！ここはM-1か？」

「美咲いゝ。そんなヤボな事聞かんというて？」

「聞くだろ！なんだそのパーティーセット一式は！」

「そうやったな。俺らのダブルス試合をまだ見てなかったもんな。

良く聞け。俺らは『お笑いテニス』や。勝ったモン勝ち。笑かしたモン勝ちの校則を忠実に守った伝統あるテニス形式や。」

「笑かすだけやなくテニスの腕は真打クラス。立海の二人も笑かしてくるで。」

『立海サービスプレイ！』

皇帝VS美咲（後書き）

民主主義の王子様アナザーストーリー翔編の連載をスタートさせました。

立海に転校してきてテニス部に入るまでのいきさつを描いていくつもりです。興味があったら是非読んでください♪^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9024x/>

民主主義の王子様

2011年11月27日19時48分発行